



空手部の頃・ラスト



中山内科医院 中山 仁

油断していたら後期高齢者になってしまい、
体のあちこちにガタがきています。

診察している目の前の患者より、自分が
よほど病人かな、と思う日もあります。

そんな老残の身で空手部の話もないもんですが、少々面白い話なので御一読下さい。

大学三年の秋、わが東京医大空手部は「全日本大学空手選手権」出場の為、大阪入りした

医学部リーグでは強豪と自負していたが一般の選手権（いわゆるホンチャン）は数年振りの出場権獲得だった。

前日に神戸の先輩、田所医師に招待され、豪勢な中華料理でもてなしてもらった。

中華料理なんて、ラーメン、チャーハン、ギョーザくらいしか食った事のない我々は見た事もない高級中華に感嘆した。

「これはな、皮がメインだ。肉は少々だけ食べて、ほとんど捨てるから、ぜいたくなもんだ」とてらてらした鳥の丸焼きみたいな、皮をいくつも四角に切ったものを自慢した。

「あの、これが北京ダックというやつですか？」と私が訊くと、「お、よく知ってるな」と喜ばれたが、ひねくれた私は“案外、他の料理に使ってないかな”と邪推した（たとえば、バンバンジーとか）。

貧乏学生には肉を捨てるなんて納得できなかつた事もある。阪神タイガースのチームドクターをしている田所先輩は有名選手のエピソードを面白く話し、関西人らしいな、と思った。

翌日、新大阪駅から試合会場に入った。対戦相手は抽選で決まり、強豪のT大となり、ありや～、と思ったが、ここに来ているチームに弱いチームはないので納得した。

5人編成のチーム戦で、私は大将で、先輩の牛尾さんが副将だった。試合コートの反対側にはT大の猛者が並び、一際目立つ大将は背丈は私と同じくらいだが、幅も厚みも私の1.5倍はありそうな、がっしりした偉丈夫で、「ありやあ、空手より、柔道じゃろう」と牛尾さんがささやいた。試合は先鋒、次鋒、中堅とトントンと順調に（？）負け、牛尾さんもあっさりと負けてしまった。

それで、私はどう感じたかと言うと、これが妙にリラックスしていた。と、言うのはチーム戦なので、すでに0-4で敗退が決まっていたからだ。もしかしたら、相手も拍子抜けしていたのかも知れない。西郷隆盛みたいな顔の相手の大将は穏やかな、闘志の見えない表情だった。審判は「始めっ！」と声を発した。大会前の一ヶ月の猛練習で、私の体はキレキレだった。イヤッ！と前蹴りを放つと、ビシッ！と小気味いい音を立て、相手の道着を弾いた。「中段前



イラスト：中山 仁

隨

筆道の記号は、筆の形を模して作られた複雑な組合せで、筆の運びや筆の力強さを表現するのに用いられる。

蹴り一本！」と主審の手が上がった。これには私自身、驚いた。余程、見事な技でないと一本勝ちはない。私はそれまで一本勝ちした事はなかった。だが、審判団が集まり、ザワザワと協議を始めた。その間、私も相手も自チームの前に正座して判定を待つ。

背中の方から相手チームの監督の怒声が聴こえた。“お前、何やってんだ！馬鹿野郎！相手は医大だぞ！わかってんのか？医学部に負けるなんて、こんな恥さらしがあるかっ！よりもよって医学部なんぞに…”

さすがに、言いすぎだろ、と少々ムッとした。協議が終了し、“中段前蹴り、技あり”と修正され、試合再開となったが、これも気に入らない。“医学部の一本勝ちはだめかよ”と思ったが、主審の始め！の声がかかるとそれどころでなくなった。西郷くんは、さっきまでの穏やかさは一変し、悪鬼の形相で、だっ！と攻撃してきた。突き！突き！蹴り！蹴り！と猛烈な連続技で、うりやうりやうりやっ！と突進してきた。私は必死のバックステップで後退するしかないが、あまりのスピードにたまらずコート外に出てしまう。“こら！戻って！”と審判に中央に戻されるが、再開すると同じパターンで、弾き出された。反撃する余裕はなかった。

“君、次、飛び出したら負けだぞ！”と主審



に注意された。場外3回で負けらしい。

そんなルールあったの？と思ったが、相手はパッと顔を輝かせたのがわかった。

技ありでの勝ち逃げは許さない、という事らしい。主審の始め！の合図がかかるや、相手はもっと激しくダッ！と突っ込んできた。“あ、顔面がらあき！”「上段突き、技あり、合わせて一本！」主審の手が上がった。反射的に突きを出していた。一礼して自チームに戻ると、牛尾先輩が突っ立って、目を丸くして、口をあんぐり開けている。“え？ 何が…”と思った。「おまえ…どえらい事しよんなあ…」とあきれたよう言つた。「知っとんのか？ あいつ、全日本2位だぞ！ 去年の個人戦準優勝者だ！ は？ 知らんかった？」（本当の話です）



後列左端が1年生部員の私です